場

12画

ジョウ（チャウ）
ば・にわ

易は玉（ぎょく）（日）を台（一）の上に置き、玉の光が下方に反射する形。易は霊の力を持つと考えられた玉によって、人の精気を盛んにし、豊かにする魂振（たまふ）りの儀式をいい、その儀式の行われるところを場という。また神を祭るところを場といった。

（白川静「常用字解」平凡社 より）

淡座

江戸にまなび、音と言葉のあわいをえがく

淡座（あわいざ）は、現代音楽、クラシック音楽、日本の芸術文化を行き来し、文化の古今と東西をつなぐことを目的とした、クリエイショングループです。

私たちは、様々な日本の文化のなかでもとりわけ、江戸文化から学ぼうとしています。江戸文化独自の発想のもと、「形のないもの、目に見えないもの」、つまり、言葉、文化、哲学、思想など、ひとの生活を豊かにするものの在り方を模索し、作品や演奏として発信しています。

次回公演

バッハと端唄

2022年12月4日㊐
於 安養院 瑠璃光堂

バッハは1685年に生まれ、1750年に亡くなりました。徳川吉宗は1684年に生まれ、1751年に亡くなったので、ふたりは生死をほとんど同じくしています。かたやヨーロッパで、かたや江戸で、同時代に生まれた音楽のあわいをさぐる試み。

お問い合わせ▶ メール info@awaiza.com ・ お電話 080-4091-6491

●黒田 鈴尊（くろだ れいそん）（ゲスト）

20歳でピアノから尺八に転向。人間国宝・青木鈴翁、三代青木鈴慕各氏に師事。早稲田大学人間科学部、東京芸術大学大学院修士課程修了。2019年、文化庁文化交流使として、6カ国、16都市にて公演するなど、世界を舞台に活躍中の若手尺八奏者。

バッハの場（にわ）番外

日時　2022年9月11日㊐ 15:30開場・16:00開演

会場　安養院 瑠璃光堂

ゲスト出演　黒田 鈴尊（尺八）

淡座メンバー　三瀬 俊吾（ヴァイオリン）
竹本 聖子（チェロ）
本條 秀慈郎（三味線）
桑原 ゆう（作曲・編曲）

宣伝美術／桑原ゆう
共催／安養院
一般社団法人 淡座

バッハの音楽は「場（にわ）」になる。

番外

バッハの場（にわ）

ゴルトベルクの旅

バッハの音

awaiza.com

● 曲目と解説

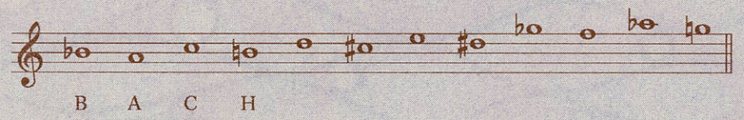
昨年、半年かけて行った、ヴァイオリンとチェロの無伴奏作品連続演奏会「バッハの場」の番外公演。鍵盤音楽の金字塔《ゴルトベルク変奏曲》に、尺八、三味線、ヴァイオリン、チェロの世界初の編成で挑みます。

昨年末の第６回で発表がかなわなかった、独奏ヴァイオリンのための新作も、満を持して、このたび初演をむかえます。こちらもぜひ、お楽しみください。

桑原 ゆう／無伴奏ヴァイオリンのための バッハの名による小ソナタ（2021-22）

1. プレリュード 2. アルマンド 3. クーラント 4. サラバンド 5. フーガ
6. ルール 7. ガヴォット 8. メヌエット 9. ブーレ 10. ジーグ 11. シャコンヌ

バッハの名前（BACH）をドイツ音名にすると、「シ♭・ラ・ド・シ♮」という音の連なりが得られる。バッハ自身をはじめ、古今さまざまな作曲家が作品に用いてきた、あまりにも有名なこの音の連なりから、以下のような12音の音列をつくり、11の小品から成る小ソナタを構想した。



普段の作曲において、私はあまり音高を重視しない（音高は、音の状態のひとつの側面に過ぎず、どちらかというと、触感やテクスチャーを重要視している。）のだが、今回、「ソナタ」を作曲することは、音高の扱いについて如何に考えるかだと見なした。そのため、音高の使用について、ある種の制限をもうけることにした。

第１曲プレリュードは、上記音列の最初の２音、つまり「シ♭・ラ」のみで作曲。第２曲アルマンドは、音列左から３音「シ♭・ラ・ド」のみを使用。第３曲クーラントは、音列左から４音「シ♭・ラ・ド・シ♮」、第４曲サラバンドは音列左から５音「シ♭・ラ・ド・シ♮・レ」…というように、各曲を、限られた音高のみを用いて作曲することにした。曲を追うごとに使える音高が増えていき、11曲目にあたる終曲のシャコンヌで、やっと12音全てが使えるようになる。

あらかじめ、各曲を１ページの楽譜でおさまる範囲で作曲すると決めておいた。（シャコンヌのみ、１ページ半ある。）各楽想は、バッハの無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ全３曲、およびソナタ全３曲、無伴奏チェロのための組曲全６曲に採用された様式を、ほぼ網羅するようにえらび、バロック組曲にならった順番で配置した。昨年の「バッハの場」で、半年かけて演奏した全12曲を、走馬灯のように振り返るねらいである。

11の小品は、バロック組曲の楽想にのっとりながらも、ヴァイオリンで可能なあらゆる奏法を駆使して展開する。バッハと、バッハに影響を受けた多くの偉大な作曲家たちに連なりたい想いを込めた、小ソナタである。

（文／桑原 ゆう）

J.S.バッハ（桑原 ゆう編曲）／ゴルトベルク変奏曲 BWV988

「２段鍵盤付きクラヴィチェンバロのためのアリアとさまざまな変奏」と書かれ、1741年に出版された作品。元ロシア大使のカイザーリンク伯爵は、病気がちで不眠に悩み、その苦しみを和らげるため、召使いのゴルトベルクが寝室の隣室で音楽を奏でる必要があった。そこで、バッハが依頼を受け作曲したのが、この《ゴルトベルク変奏曲》といわれる。主題のアリアのあと、30の変奏（ヴァリエーション）を経、再びアリアに戻り終結する、長大な作品である。

30の変奏のうち、３の倍数にあたる変奏はすべてカノンである。第３変奏は同じ音のカノンで始まる。第６変奏では、主題を追いかけるカノンは２度上の音になり、順々に音の差は広がる。この作曲法は非常に論理的で、変奏曲のバスの進行を取り入れると制約が多く、作曲は困難を極めるはずである。しかし、パズルを組み立てるような無機質な音楽になっていないどころか、そのような法則を忘れさせるほど、純粋な音楽として成立していることに驚愕させられる。３の倍数以外の変奏もバラエティーに富み、様々なコントラストや緻密な構成により、30の変奏が理路整然と並ぶ。

「３」という数字は、変奏の数だけでなく、《ゴルトベルク変奏曲》全体において、重要な数字のようだ。主調はト長調だが、ト短調の変奏が３つ、主題のアリアは３拍子。他にも、バッハの作品集の多くは３の倍数で構成されている。想像の域を出ないが、プロテスタント・ルター派の信徒であったバッハは、「すべての良いことは３つ重なる」（Alle guten Dinge sind drei.）という古いことわざの通り、「３」という数字をとりわけ大切にしていたと思われる。

《ゴルトベルク変奏曲》は、今日とても人気の高い作品で、様々な編成に編曲され、親しまれている。私は留学中、繰り返し《ゴルトベルク変奏曲》のＣＤを聴き続けていた。ＣＤの繰り返し機能によって延々と再生が続き、永遠に終わらない音楽のように感じられた。思い入れの深い作品を、このような世界初の編成で演奏できることを、心より楽しみにしている。

*

アリア（3/4 拍子）
これから続く30の変奏の主題。バスの動きが《ゴルトベルク変奏曲》全体を支配する。
32小節のこのアリアは、16小節ずつの前半後半、すべて４小節ずつのフレーズで、完璧なシンメトリーを構築している。アリアを含め、すべての変奏は、前半と後半にそれぞれ繰り返し記号が付いている。

第１変奏（3/4 拍子）
２声のインヴェンション。桑原編曲により、４つの楽器のアンサンブルが始まる。

第２変奏（2/4 拍子）
通奏低音のバスと、カノン風の上２声による３声の小品。

第３変奏（12/8 拍子）
同度（同じ音）のカノン。桑原編曲では、前半は尺八の旋律をヴァイオリンが、後半はヴァイオリンの旋律を尺八が追いかけるカノンとなる。

第４変奏（3/8 拍子）
３拍子の舞曲のような変奏。チェロだけでなく三味線も、通奏低音を担う。

第５変奏（3/4 拍子）
２声のトッカータ。１段、または２段鍵盤のためと書かれており、１段鍵盤で演奏する場合は、両手が交差する難易度の高い変奏になっている。

第６変奏（3/8 拍子）
２度（ひとつ上の音）のカノン。ヴァイオリンがＧ（ソ）から演奏した旋律を、尺八がＡ（ラ）から演奏して追いかける。

第７変奏（6/8 拍子）
「al tempo di Giga」（ジーガのようなテンポで）と書かれた、シシリアーノ風の舞曲。

第８変奏（3/4 拍子）
２声のトッカータ風で、16分音符が終始駆け回る。原曲は２段鍵盤で演奏される。

第９変奏（4/4 拍子）
前変奏から一転、穏やかな雰囲気の３度のカノン。ヴァイオリンの旋律を、尺八が３度下の音で追いかける。

第10変奏（2/2 拍子）
Fughetta（フゲッタ）と書かれた小フーガ。４声が順番に名乗りを上げる。

第11変奏（12/16 拍子）
全体の1/3の変奏が終わり、仕切り直すように始まる、２段鍵盤のための変奏。

第12変奏（3/4 拍子）
４度（下）の反行（鏡像）カノン。ヴァイオリンがＧ（ソ）→F#（ファ#）→Ｇ（ソ）と先行すれば、チェロはＤ（レ）→Ｅ（ミ）→Ｄ（レ）と鏡のような動きをする。

第13変奏（3/4 拍子）
32分音符の細かい動きの息の長い旋律と、２声のポリフォニックな動きによる、３声の変奏。前半後半ともに、終わる直前の和声が印象的に響く。

第14変奏（3/4 拍子）
２段鍵盤による、めまぐるしい動きの２声。前変奏とのコントラストが見事である。

第15変奏（2/4 拍子）
５度（上）の反行カノン。前半最後の変奏で、初めてのト短調。Andanteという具体的なテンポの変化の指示も初めて。消え入るような終わり方が印象的である。

第16変奏（2/2 拍子→3/8 拍子）
華やかに後半の始まりを告げるOuverture（序曲）。後半は3/8拍子になり意表を突く。

第17変奏（3/4 拍子）
２段鍵盤のための２声のインヴェンション。バスは広い音域を上下に行き来する。

第18変奏（2/2 拍子）
６度（上）のカノン。カノンではないバス声部も旋律的に動く。

第19変奏（3/8 拍子）
３声のメヌエット。アリア主題のバスの動きが分かりやすく提示される。

第20変奏（3/4 拍子）
２段鍵盤による、２声の跳ね回るような華やかな変奏。

第21変奏（4/4 拍子）
ト短調の７度（上）のカノン。前変奏の雰囲気を、バスの半音階進行が一変させる。

第22変奏（2/2 拍子）
４声のポリフォニー。第18変奏同様に、小節の後半から別声部が現れる。

第23変奏（3/4 拍子）
２段鍵盤による軽やかな変奏。後半になると声部が増え、４声で力強く終曲する。

第24変奏（9/8 拍子）
２小節遅れて追いかける、８度（下）のカノン。

第25変奏（3/4 拍子）
ト短調でAdagio（アダージオ）の標記。荘厳な雰囲気のなか、バスの半音階進行が第21変奏を想起させる。

第26変奏（18/16 拍子と 3/4 拍子）
16分音符が動き続ける18/16拍子と、サラバンドのリズムの3/4拍子が同時に進行する。サラバンドのリズムが次第に消えていき、気付けば16分音符だけになる。

第27変奏（6/8 拍子）
２段鍵盤による９度（上）のカノン。初めて２声で構成されたカノンである。

第28変奏（3/4 拍子）
32分音符の動きが印象的な２段鍵盤による変奏。32分音符がなくなると、16分音符のアルペジオ風の動きが現れる。

第29変奏（3/4 拍子）
１段または２段鍵盤による変奏。力強い主題の上を、３和音や３連音符が駆け巡る。

第30変奏（4/4 拍子）
Quodlibet（クオドリベット）。順番としては10度のカノンが来るのだが、バッハは最後の最後に、《きゃべつとかぶら Kraut und Rüben》と、《あなたとは久しく会っていない Ich bin so lang nicht bei dir g'west》の、２つの民謡を引用した。クオドリベットとは、異なる複数の歌の旋律を、同時に、即興的に重ねて歌う遊びである。唯一のアウフタクトを持つ変奏で、バッハの引き出しの多さに感嘆するばかりである。

アリア・ダ・カーポ（3/4 拍子）
ダ・カーポとは、曲冒頭に戻るという意味。30の変奏を経て、アリアへと回帰する。ゴルトベルクの旅の始まりを思い返しながら、桑原編曲の妙を堪能していただきたい。

（文／三瀬 俊吾）